高知県立坂本龍馬記念館だより　2010（平成22）年4月　第73号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

龍馬（ひとう）

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

切磋 SESSA TAKUMA 琢磨

激増入館者

龍馬記念館は“うれしい非常事態”が続いている。入館者増加の対応である。前年の3倍を超える日が珍しくない。21年度の入館者は平成3年開館以来、初めて20万人を突破する。新しき龍馬ファンが生まれている。また、龍馬記念館は来年開館20年の大事な節目を迎える。新たなスタートに向けての準備開始だ。

森　健志郎

『龍馬と啄木』展

●4月17日（土）～7月16日（金）

明日の風景

“無謀”にチャレンジ

両県知事の対談も

坂本龍馬と石川啄木。生きた時代も、生き方も全く違う。しかし、なぜか“会わせてみたい”二人である。

今月十七日から「龍馬と啄木展～明日の風景」が始まる。

「無謀だ」。

「龍馬と啄木展」開催計画を聞いた当館運営協議会委員からの第一声である。

一呼吸あって「でも、面白いかもしれん」。

明治期の歌人・石川啄木と幕末の志士・龍馬のコラボレーションは、この「無謀であるけれど面白い」という一語に尽きるようだ。

私は中学生の頃知った「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたわむる」という歌を思い出した。もちろん三行詩である。今読み返すほどに、啄木は新しい。

わきあがる感情を抑えられぬまま、一夜に膨大な歌を詠んだ啄木。それは眠れぬまま、家族や友人に手紙を書き綴る龍馬の心境を思わせる。「石を持て追われるごとくふるさとを出しかなしみ」を抱いた啄木。「世の人はわれをなにともゆはばいへ　わがなすことはわれのみぞしる」と詠んだ龍馬。かれらは何を求めていたのか。

七百年の歴史を転換させた男と、自分自身を求道した男。龍馬と啄木という、まったく違う人生を生きた男たち。

今回、岩手県と高知県の交流事業の一環として石川啄木記念館（岩手県盛岡市）から「龍馬と啄木展」開催の提案をいただいた。思ってもいない取り合わせであった。思えば、岩手生まれの啄木の父・一禎は高知で終焉を迎えている。啄木が釧路にいた頃、龍馬の子孫たちは同じ釧路で暮らしていた。

また、龍馬の曽祖父・井上好春は歌人である。嫁いだ娘、つまり龍馬の祖母はその風雅を坂本家に伝えた。龍馬や家族は歌に親しみ、龍馬の長姉は二千首の歌を残した歌人でもある高松順蔵に嫁いでいる。

歌を中心に新しい龍馬が見えてきそうだ。東北・岩手や天才歌人石川啄木が近くに感じられる。新しい企画展が生まれそうである。

前田　由紀枝

共催／財団法人石川啄木記念館
啄木龍馬特別企画展実行委員会
「近江屋対談」（関連企画）
ゲスト
第1回　4月17日（土）
石川啄木記念館学芸員
山本玲子氏
第2回　5月28日（金）予定
岩手県知事・達増拓也氏
高知県知事・尾崎正直氏

発見された岡三橋の書

幻の「自然堂」

渋谷　雅之

坂本龍馬と自然堂

坂本龍馬が下関の伊藤九三(助太夫)と関わりを持つようになったのは慶応元年閏五月、龍馬が下関に滞在して薩長の和解を周旋していた頃と推測されている。その年の十月十二日付で長府藩士・印藤肇(聿)に宛てた龍馬の書状には「二白　今夜も助大夫とのみ呑ており申候」とあり、既に親密な関係になっていたことを窺わせる。

慶応三年はじめ頃から龍馬は伊藤家を宿所とし、その寓居に「自然堂」の扁額を掲げ、西国における活動の拠点とした。二月十日には妻のお龍を伴って伊藤家を訪れ、以後お龍は伊藤家に預けられることとなる。「自然堂」の扁額は龍馬の死後も伊藤家に掲げられていたが、時を経て太平洋戦争における下関空襲の災禍を受ける。伊藤家ご子孫のお話では、このとき下関市の計らいにより木箱三箇分の資料が難を免れたが、「自然堂」の扁額はこれらに含まれず、遂に焼亡したという。

こうして「幻」となった「自然堂」の書を誰が書いたかについては、宮地佐一郎著「龍馬百話」(文藝春秋)に記録がある。

これによれば、「長州の名書家岡三橋の描いた横書の額」とされており、「嘗て坂本龍馬、此の号を以て伊藤君に贈る。越堂之を書す」という漢文の添書があったという。

岡三橋は通称彦太郎といい、山口御堀の医師・岡明甫の子である。書をよくし、はじめ竹城と号し、のち三橋と改めた。他に守節、止私の別名がある。松下村塾で吉田松陰に学び、維新後は太政官に出仕して累進し、内閣書記官となり、明治二十七年、六十二歳で没した(近世防長人名辞典他)。

龍馬はこの自然堂を自らの号としても用いており、慶応三年十一月十三日付(推定)で陸奥宗光宛に書いた書状の最後に「自然堂拝」と署名している。ただし、そのような書状は数多い龍馬の書状のなかで、これだけであり、龍馬がどの程度本気でこの語を号したのかはわからない。なお、龍馬が自然堂を号していたことは「板倉槐堂筆・梅椿図(血染之軸)」(国指定重要文化財)に書かれた長岡謙吉による鎮魂賦の冒頭に「自然堂直柔先生」の文字が見えることからもわかる。

ところで「自然」は「じねん」と読む。仏教的には、「理屈抜きの、やむにやまれぬ気持ちをいい、わき上がる力で山川草木をいとおしむ」という意味に解され、老子に見える「自然」は、「何も無いところから物事が生まれる」と言うほどの意味だそうである。「ネイチャー」の訳語としての「しぜん」が広く用いられるようになるのは明治中期以降のことだという(沼田真著「自然保護という思想」)。

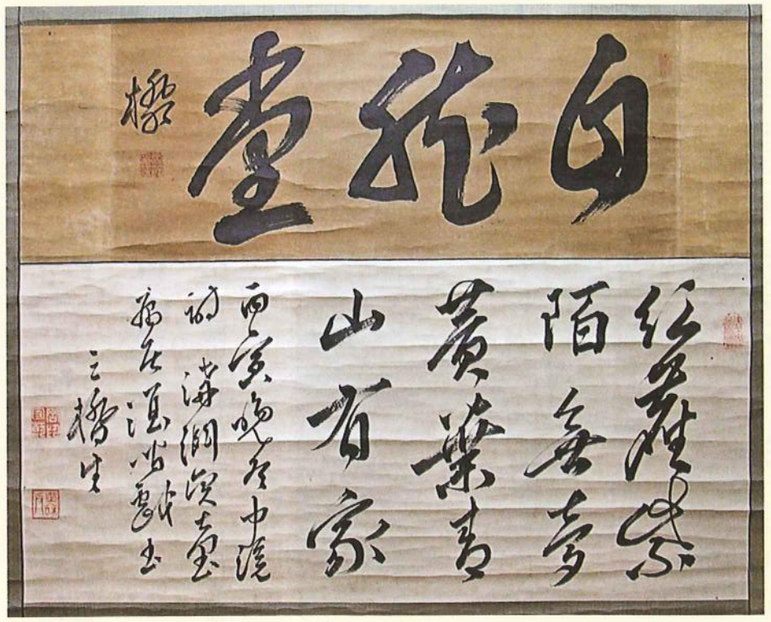
以上の「じねん」の意味からすれば、印藤肇宛の書状に「良林及海中の品類よきものを得ハ、人をうつし万物の時を得るをよろこひ、諸国浪生らを命して、是か地を開かすへしと、其余思千万ナリ」と書いた龍馬の心境に重なるものがあるのだが、一方では、なにやら意味ありげな名号を用いる訳知り顔の龍馬は筆者のイメージからは少し遠い。むしろ、龍馬一流の遊び心だったと捉える方が「しぜん」ではなかろうか。

溝渕廣之丞の長州訪問

溝渕廣之丞は土佐藩から井上俊三らとともに長崎に差し立てられ、慶応二年正月頃から同三年十月まで滞在した。用務は「舎密学修業」と記録されているが、探索方としての役割が主だったと思われる。慶応二年六月の四境戦争では高杉晋作とともに丙寅丸に乗り込んでいたことが資料からわかっているが、この時期、山内容堂は幕府側の松山藩に土佐藩船・南海丸を貸し与えていた。土佐藩としては幕府・長州のどちらが勝っても肝の冷える状況にあったのである。そして長州の勝利を見届けた後藤象二郎が、同年七月に長崎にやってくる。

禁門の変以後、冷え切っていた土佐と長州の和解を、四境戦争の勝利者である長州に持ちかけるのは後藤にとって頭の痛い課題だったに違いない。その役割を託すのは、旧くから龍馬の知己であり、下関海峡戦の頃から龍馬と接触を保っていた廣之丞しかいなかった。後藤は廣之丞に旅費を支給し、龍馬と廣之丞を土佐藩の公式使者に変身させる。二人が長州で演じた工作の状況は、龍馬や木戸孝允の書状等によって細々と記録されている。

長・土の和解を成功させた廣之丞は、「先日入御聴候小弟志願略相認候間」に始まる有名な書状を龍馬に書かせ、長州出張以前から進めていた龍馬と土佐藩の、もう一つの和解に取り組む。こちらの和解は土佐藩が廣之丞を龍馬とともに長州に出張させた時点ですでに成立しており、清風亭会談によってその仕上げが行われた。



もう一つの「自然堂」

昭和四年、平尾道雄氏が溝渕廣之丞のご子孫の宅を訪れ取材した際に一幅の岡三橋の書が発見され、「坂本龍馬　海援隊始末」に発表された。その内容は次のようである。

堂々威武拂姦邪
仰見竭来新徳華
又有餘恩到我輩
一杯邨酒一瓶花

丙寅十有二月奉詩坂本溝淵
両賢台、　酒間乗興書旧作、
大酔脱腕自不知筆所走、
下婢阿菊亦傍観、
是三橋所得意也

この書は岡三橋が龍馬と廣之丞を接待した酒席で興に乗じて書かれたものと思われ、他に「阿菊」という芸者らしい人物の名がある。おそらく以上四人が当夜の客だっただろう。そして、この時同時に書かれたのが「幻の自然堂」だったに違いない。

筆者は「近世土佐の群像(1)溝渕廣之丞のことなど」(私家版)という本を書いた際、溝渕家のご子孫の取材を行ったことが機縁で、最近廣之丞の五代目の血縁にあたられる小川純一氏(静岡県)からご連絡をいただいた。送られてきた写真には、軸装された三橋の「自然堂」の文字が踊っていたのである。そして「幻」は現実となった。

写真で御覧のように、「自然堂」の書とともに次の漢詩と解説が軸装されている。

紅塵紫陌無声　黄葉青山有家

丙寅晩冬中浣、訪　溝淵廣之丞
寓居、誼間戯書
三橋生

漢詩は、「田舎道は声もなく静か、紅葉した山里には人家が見える」と言ったほどの意味であろうか。「青山」には「墳墓の地」の意味もあるので、深い意味が込められているようにも見えるが、前述の漢詩に添えられた解説からは、三橋の上機嫌の様子が窺われるので、単に自然を詠んだ詩と、素直に解釈するのが妥当であろう。なお、添え書きにある「中浣」は、一月を三つに区切った中間の意味なので、「丙寅晩冬中浣」は、「慶応二年十二月中旬」と読める。

以上から、この酒席で「自然堂」の書と漢詩が、それぞれ二つずつ書かれたと考えられ、龍馬と廣之丞にそれぞれ与えられたと推測される。二種類の漢詩のうち、残念ながら前者は現時点で所在不明だが、二つとも溝渕家に伝わったのは、龍馬と廣之丞の親密な関係を想像させるところである。

筆者は、謎に包まれている長土和解会談の雰囲気を間接的に伝える資料に出会えたことに感謝し、多くの人々にこの書軸をご覧いただける機会のあることを願っている。

書軸の公表をお許し下さった小川純一氏および漢詩の解読に関してご助言下さった徳島大学の桑原恵、田中智行両先生に感謝する。

徳島大学名誉教授

「鍔は知っている！」①

土佐の幕末維新

土佐歴史資料研究会　現代龍馬学会　小島　一男

（画）和田 通博

はじめに

土佐山内家には多くの宝物や歴史資料が収蔵されている。しかし、中にはやむを得ず流出した名品も少なくない。ここではそんな名品の中の一つを紹介する。それは一枚の刀の鍔「一心不乱に」と称される鍔である。この鍔に秘められた暗号をひも解いていく。こんな話もある。この鍔を写したもう一枚の鍔が存在する。なぜ"写した"のか。その理由は？史実に若干の推察、脚色を加えながら幕末土佐の"歴史街道"を歩く。

「一心不乱にの信家」

宗義の名誉

慶応2年（1866）世はまさに幕末の激動期、正月には坂本龍馬、中岡慎太郎らの努力もあって「薩長連合」の密約がなった。幕府は6月、第二次長州征伐、下関戦争で敗退し、幕府衰退を世に印象付けた。勢いそのままに倒幕の機運は高まりつつあった。

土佐藩もようやく和銃（火縄銃）を廃し、ゲベール銃、ミニエール銃を主とした「洋式軍制」に統一し、各郡での「鉄砲講」を主とした調練が盛んに行われていた。吾川郡秋山の郷士、嶋村（細川）右馬丞義郷の日記にその様子が詳細に記されている。鉄砲講の出席者の中には、安芸郡岩崎弥太郎の名も残っている。しかしそれは、ジョン万次郎の指導の下で浦戸湾を中心とした主要港に砲台が構築されたように、あくまでも夷狄の脅威に備えた"守り"であり、倒幕のためではなかった。

文久3年（1863）7月の「禁門の変」以降、「藩論」を修正した土佐藩は元治元年（1864）より慶応元年（1865）にかけ「土佐勤王党」を弾圧した。岡田以蔵らを処刑し、その盟主であった武市半平太には切腹を命じ粛清した。幕府に対して土佐は「左幕」を印象付けた。薩摩や長州とは異なり、土佐山内家は外様でありながら「関が原」以来、徳川家への報恩の思いがつよかったのである。

そんな年の「輪抜け様」の神祭も終わり夏も本番というある大安の日の午後であった。城門を出てきた供を連れた正装白髪の老人が、御天守と藤波神社の方角に向かい、深々と頭を下げた。その顔は、ひと仕事終えた達成感と満足感とで紅潮していた。実は御隠居様（容堂）の直命を受けて制作した一枚の鍔を献上しての帰りであった。彼の名は川崎伊六、土佐藩工で甲冑師兼鍔師として50余年76歳になった今日でも名工の名も高き土佐明珍家4代紀宗義で、供は養子の宗長であった。

数ヶ月前に話はさかのぼる。宗義は山内家の宝物の中でも有名な「一心不乱にの信家」鍔を写せとの御下命を受けた。それも御隠居様御自ら「この信家に勝るとも劣らぬ鍔を宗義に作らせよ」さらに「後世に憂いを残さぬよう、自身銘をさし許す」との言葉をいただいた。藩工としてこのような名誉あることはなく、宗義は涙して拝命した。

宗義は信家を写したことは数回に止まらない。しかしこの「一心不乱に・・」の鍔には特別の思いがあった。30数年前、上士の中西武五郎が若かりし宗義にこの信家を見せ「この鍔を目標に、より良き鍔を作るのだ」と、激励した。宗義にとって鍔師の"原点"であった。また、中西は、この鍔が山内家の宝物になったいきさつなども宗義に語ったという。

参考

鍔工「信家」について

神代の昔より刀剣は武器でありながら、三種の神器の一つでもあるように、貴族や武士階級のある種象徴的な存在であり、江戸期には、武士の魂とも言われ尊重され大切に扱われてきた。また、剣術修行を通じ礼儀作法を身につけ、人格を形成し「武士道」はそれを精神的分野にまで昇華させ、刀は武士のよりどころとなり、帯刀をその誇りとした。その刀剣を装う鍔をはじめとする刀装小道具もまた同様である。

＊＊＊

鍔は大きく分けると次の二種となる。

1、鍔工

鉄を素材として象嵌（ぞうがん）された物も含む。

2、金工

素銅や赤銅等、色金を主な材料とした物。信家はその鍔工界の王者と言われ、金家と並び賞賛されてきた。

両者の作風は次のように言われている。

信家

織田信長に召致され、尾張国清洲で製作していたが、後には主人である福島正則の転封により、安芸国で制作した。その作は意匠ある文様を毛彫りにし、地に変化を付けて小透かしを加え、また、観念的な文字を彫ったものが多い。豪壮で格調の高い作風だが、象嵌はまれである。

金家

山城国伏見で製作した。その作風は雪舟の下絵で作られたと言われたほどで絵風鍔の創始者であり、繊細な中に雅味がある作風で透かしは希である。金家は最小の象嵌を施し、最大の効果を上げている。製作された時代

戦国時代末期より桃山時代に製作し、両者はほぼ同時代に活躍したがなぜか対照的な作風である。金家には「のざらし」や「卒塔婆」等を高彫りした鍔があり、信家は「南無妙法蓮華経」「人間本来無一物」等と文字を彫った鍔が多く、いかにもその時代性を反映し、戦場におもむく武将の覚悟と心構えを表している。

両者が江戸時代を通してほめたたえられるのは、その技量のすばらしさのみならず、そのいかにも観念的な意匠が好まれたと考えられる。

中でも信家は、土佐人気質に合ったとされ、土佐の明珍派鍔工が多数の信家鍔を写している。中でも4代宗義は、その名人である。

◀信家作「一心不乱に」の鍔（候爵・山内豊景氏蔵）

武五郎の予感

中西武五郎のことである。それは天保2年（1831）、長崎の町年寄であった高島秋帆がオランダより燧石（ひうちいし）式ゲベール銃を洋式小銃として初めて輸入した年であり、まさに洋式軍制への第一歩が踏み出されようとするころであった。しかし、幕末への足音はまだ遠く、江戸市中には泰平の気運が漂っていた。

桜の花がようやく咲き始めた、春の日であった。江戸鍛冶橋の土佐藩上屋敷では、嫡子十三代豊熙の婚礼（この2月に松平豊後守斉興二女と）祝儀の返礼と、老中就任の仮祝いを兼ねて、主人豊資公（十二代）が、戸田忠綱公に挨拶に出かけた。武五郎はそれを見送った後、お供を外れ自室に戻り、愛刀陸奥守吉国の柄を外し袴着、登城用の赤銅の鍔を、赤坂鍔の桜透しと掛け替えた。これは、最近入手した、武五郎お気に入りの鍔であった。

実は武五郎は、御国元の土佐では、同じ土佐藩士で「古今鍔押形」を残した森四郎の門下生で、自他共に認める鍔の目利きである。上役の桐間、生駒両家から、何かよい鍔があればなどと依頼されるほどで、前回、入手した金家は掘り出し物で大変喜ばれたりもした。その時は主君豊資公も手に取り、その見所を聞かれたという。武五郎は、鍔を御見せするたびにお言葉を頂くのが名誉であった。

今日も非番の時の常としている京橋から日本橋にかけて、道具屋を見て回ろうと思っている。うららかな春の日差しを受けて輝く川面を見ながら、鍛冶橋を渡り、南伝馬町の方に向かう。武五郎の腰間の桜透しもその手入れのよさを見せてうれしげに輝く。岸の柳も風に揺れる。武五郎は何か大きな掘り出し物に出会える予感に「フム」と身震いした。屋敷近くの「観山堂」の暖簾をくぐる。この店は屋敷に近く、何より主人の人柄がいいのが気に入って武五郎は常連客なのである。馴染みの番頭はすぐ武五郎の腰間におさまった桜透しに目がいった。

「赤坂ですか。さすが中西様、いい桜ですねえ」言いつつ頭を下げる。武五郎は店内を見回して

「なんちゃあ変わった物は出ちょらんのう」御国言葉丸出しで、出されたお茶をすする。主人も寄ってきて気の毒そうな顔になって言った。

「此の頃は、金家も信家も、納まるところに納まったのか、とんと顔を見せてくれません」

たわいもない話を小一時間も交わしたろうか。話が途切れたころあいを見計らったように、通りを渡ってきた見るからに品の良い武士が中間を外に待たして、店に入ってきた。（次回に続く）

拝啓 龍馬殿

12月21日～3月20日

262通

8才にして貴方を師として愛している息子。里帰りで高知へ来るたび色々な跡地や記念館に足を運ぶ息子。京都にあるお墓にて「会いに来たぜよ、待たせたねぇ。こっからやったらまっこと京の街がよう見える」と土佐弁で涙ぐみながら手を合わせておりました。龍馬は「強胆」「野生的」「行動派」などなど色んな龍馬像があげられる中で、息子が言いました。「龍馬といえば優しさのかたまり」だと。優しかったが故の人気者なんだと言ってました。これからも息子の心の支え、教えとなって助けてやってください。

（12月28日　静岡　K・S　32歳　女性）

やっとやっと来られました。約40年かかりました。嬉しく思います。

（1月1日　東京　M・S　女性）

龍馬殿は日本の象徴、我らの誇り。高知に生まれ、他に誇れる勇姿と活力を戴きました。遠く三河に働きに出て、やっと故郷に帰り、心身共に大先輩に教えを受けたく、初めて来ました。今年はきっと良い年になると思います。龍馬殿の心を広く伝えていける人間になりたい。

（1月2日　高知　Y・S　70歳　男性）

はじめましてこんばんみ。龍馬先生！ボクちゃんの事も洗濯してください！

追伸：柔軟剤もお願いしますネ。

（1月7日　埼玉　ピピる大木　35歳　男性）

我が家には8歳と6歳の息子がいます。歴史にとても興味を持ち、先週始まった坂本龍馬のドラマを観て、今では龍馬さんの大ファンです。今日は朝4時に起きて広島から来ました。泣き虫で勉強も出来なかった龍馬が、このように立派な人となり、子ども達にとってすごく励みになっています。これからも応援します。

（1月10日　広島　H・H　36歳　男性）

僕は今、東京赤坂の氷川町という場所に住んでいます。マンションの入口には「勝海舟邸跡」と書かれています。あなたもかつて歩いた場所でしょうか。今日はいい天気。太平洋もとてもキレイで来てよかったです。

（1月14日　東京　T　30歳　男性）

いつもありがとうございます。これからも「志事」顔晴ります。

（1月23日　大阪　H・I　50歳　男性）

昨今のブームを見れば、時代は再びあなたを求めていると思えてなりません。強さと優しさ、人と人をつなぐ力、結集する力がこの国には必要なのです。あなたは人間がどうあるべきかを常に考え、信念を持っていた。僕もそれを大切にしていきたい。応援していてください。

（1月23日　奈良　K・K　53歳　男性）

初めて四国を訪れました。本日の高知は最高に良い天気です。美しい桂浜に感動しました。ミーハーで訪れた土佐ですが、この資料館や街のいたるところで龍馬さんについて、幕末について、勉強させてもらいました。また来ようと思います。

（1月24日　福岡　M・O　28歳　女性）

ここは館長の部屋　森　健志郎

四万十川の流れに

西土佐村に講演に行くことになった。もちろん、日帰りである。会場は昨年の暮れ朗読・コンサート（小林綾子、西村直記）でお世話になった"ふれあいホール"だ。村の小高い丘の上にある。下方に四万十川を見る。抜群のロケーションが記憶にある。ただ、イメージとして西土佐村は高知と愛媛県境の山の中で"遠い、遠い"。高知市内からだと車で3時間は計算しなければならぬ。

余裕を持ってその日は午前9時にはハンドルを握っていた。高知―須崎間は高速で、四万十町窪川から北に入った。四万十町大正、十和を経て目的地へ。予想外だったのはこの道が快適だったことである。まず道路がきちんと整備されていて交通量は少ない。何より道路に沿って走る四万十川と沈下橋の風情が快適さを増幅する。重なる山々の緑が匂ってくる。何時までも走っていたいようなドライブコースだ。

大正、十和地区にはそんな思惑もあるのだろう、ちゃんと"道の駅"が待っていた。車を止めて、大気を吸う。岸辺に通じる小道の先に船着場の要領で大きい岩があり、そこで中年のご婦人がスケッチブックを広げていた。風景を楽しむように遠くから見ても筆は軽い。歌でも口ずさんでいるのかも知れない。水は澄んでいる。

地元の人だろう。川漁師さんかも。長靴を履いている。手ぬぐいを首にかけてタバコをくゆらしながらおじさんがゆっくり通りかった。紫色の煙が大気に溶け込んでゆく。やおらタバコを消したおじさんが遠慮するようにスケッチブックを覗き込んだ。絵と風景を見比べてフムフムとうなずく。納得、納得の仕草。ご婦人も、おじさんも何もかも全部一つが四万十の風景である。

突然、おじさんがジャンパーに手を突っ込んだ。携帯電話を取り出した。上流向いて顔を上げ話している。「ザー」と流れの音が急に聞こえてきた。川面がきらきら輝いた。なぜか、あの大河ドラマ「龍馬伝」で香川照之さんの演じる岩崎弥太郎の、ほこりまみれの顔が浮んだ。"四万十のこの清流で、顔を洗わせてやりたい"と。

講演は無事に終えることが出来た。

森　健志郎

お陰様で身分の上下はないなったけど、いつの世も政治家っちゅうもんは…。高知の発展に御尽力ありがとう！今の経済はどうしたら良うなるろうねぇ？

（1月29日　高知　I　56歳）

友達の息子さんが龍馬にはまっているとのことで、松山から訪れました。興味津々で真剣に見てまわっていました。私も勉強になりました。『龍馬伝』も見ていますが、見入ってしまいます。どんな人だったのだろうと思い、つかみどころのない感じで余計に興味がわいてきます。もっともっと知りたいと思います。

（1月30日　高知　K・N　41歳　女性）

何度も来ました。また来ます。悩み考えまた来ます。好きじゃ龍馬！

（2月3日　大阪　H・S　48歳　男性）

高知生まれなのに初めて来ました。坂本龍馬という人に一度会ってみたかったと思います。実に愛すべき人物であったと思います。土佐の誇りです。

（2月10日　高知）

初めまして！龍さんを深く知ったのは10年前の新人社員として東京に来たときでした。仕事にも、生活にも苦しくなったとき、激動の中、一人で立ち向かう龍さんを知り、大変励ましてもらいました。私も、龍さんに負けず、己の信念を貫く気持ちを強く持ちます。30才の節目で気持ちを洗濯し候。

（2月10日　東京　M・D　30歳　男性）

きっとあなたは一緒にいたら面白くてめんどうくさい男でしょうね。私はきっと一緒にはいられない。弟みたいな人だ。先走って生きてくれたから、明治維新が進んだ。あなたのような人がいないと、日本は変わらないんですね。変人、もっと堂々と生きよ。

（2月10日　埼玉　H・T　32歳　女性）

2010年（平成22年）の日本は坂本龍馬殿あなたの話題でもちきりです。福山雅治さん演じる龍馬さんは本当に素敵で、魅力的な人物であったと改めて知ることができました。激動の幕末期に活躍されたあなたの功績は、21世紀の日本でも光り輝いています。これだけ愛された歴史上の人物はあなたをおいて他にいません。僕もあなたのような人物になるべく、日々精進してまいります。今回の四国旅行で、土佐・桂浜を訪れ、龍馬という人物に触れることができて、本当に幸せで嬉しく思っております。

（2月24日　岐阜　Y・H　22歳　男性）

龍馬さんのおかげで今の日本があります。ありがとうございました。今年の大河ドラマで今まで興味のなかった幕末がおもしろくて好きになりました。これからもこれをきっかけに歴史などを勉強していきたいと思います。

（2月27日　兵庫　A・T　15歳　女性）

僕は龍馬さんの適当でしっかりした性格が好きです。坂本先生に憧れ剣道を始め、国の為に働きたいと思い、四月から江戸で役人として働きます。坂本先生は役人がきらいだそうですが、別にいいです。これからも、頭の片隅に自分なりの坂本先生を住まわせて生きて行きます。

（2月27日　愛知　T・K　23歳　男性）

初めまして。日本中をまわる一人旅のゴールとして桂浜に来ました。ゴールのつもりでしたが、ここが新しいスタート地点にしたいと思います。これから真っすぐに一生懸命生きていきます。天国で見守ってください。

（3月12日　神奈川　J・S　29歳　男性）

＊＊＊ 編集者より ＊＊＊

いよいよ大河ドラマ『龍馬伝』が始まりました！龍馬イヤーの幕開けです。当館の入館者数も3倍以上に増え、この拝啓龍馬殿にも「龍馬伝見てます」の声が寄せられています。龍馬イヤーはまだまだ始まったばかり。春は新たな門出にあたり、龍馬に会いに来てメッセージを残される方が多い季節です。きっとこの春もまた…。ほいたら待ちゆうきね。

尾﨑　由紀

退任の挨拶

龍馬の殿堂として

振り返れば坂本龍馬記念館にお世話になってから14年、あっという間でした。来年、館は開館20年です。共に歩んできたとの実感が強くあります。資料も少なかった苦労の時代からすっかり"龍馬の殿堂"としてファンの間で定着してきた昨今、将来に向けて館の発展を思い願いやみません。大河ドラマで忙しい時期での退職はいささか気が引けるのですが、人生のけじめという意味で決心しました。これからは外から龍馬記念館を見させていただきたいと思います。長い間、本当にありがとうございました。

西笛　貴久代

新人紹介

"トレンド""旬"

勤めを開始した時、「この時期、龍馬記念館！トレンド！」

「今が旬のとこやね！」

こんな周囲の反応がありました。"さすが龍馬"だとその注目度に驚いたものです。

私も及ばずながら龍馬ファンの一人。毎日、龍馬と海を感じながら、微力ながらお役に立てるよう努力したいと思います。

佐々木　恵

介護の世界から

介護という全く別の分野からの転職ですが、縁あってお働かせていただくことになりました。若輩者で歴史に関する知識もまだまだ浅学ですが、坂本龍馬を地元高知に、そして全国に発信する記念館業務の一助を担うべく張り切っていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

澤田　賀彦

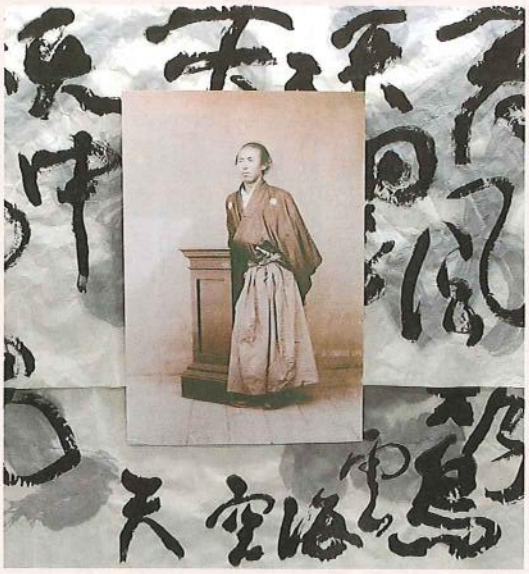
今だからこそ龍馬！

◆総得票の半分占める 幕末人気ランキングまとめ◆

「7209」この数字は?当記念館の入館者アンケート設問5番目に「幕末のお気に入りの人物を教えてください」というのがある。昨年の4月から今年2月まで11ヶ月間の投票総数である。さて、順位は。

1位 坂本龍馬　3717票
2位 勝海舟　451票
3位 西郷隆盛　320票
4位 土方歳三　235票
5位 ジョン万次郎　198票

などと続く。順位は予測の範囲として、1位と2位以下の票差の大きさは予想外であった。龍馬一人で総得票の52パーセントを占めているのだ。いまさらながら龍馬人気の深さ、広さを教えられる。



少し意外なのは龍馬伝で大奮闘の岩崎弥太郎が10位内に入っていないこと。2位の勝海舟と5位に入っているジョン万次郎は、昨年から始めた企画展「風になった龍馬」展VOL.1と共に時代を駆け抜けた人物としてぐっと得票数を伸ばしてきた。また、3位の西郷隆盛はやはり地元九州の方々が多い。4位の土方歳三は幕末人気実力の「新撰組」。6位高杉晋作、7位木戸孝充、8位はお龍と中岡慎太郎が同数、9位沖田総司、そして10位に天璋院が入った。

想像しながら

3月27日(土)から当記念館2階"海の見える・ぎゃらりい"で「幕末の志士達×書家・髙松紅真」展と題して、幕末の人物写真と髙松紅真さんの書の作品をコラボレーションした展覧会を開催する。幕末の人気人物ベスト10に加え、龍馬に縁のある人物も登場する。髙松紅真さんはそれぞれの人物をイメージして書で表現する。文字と写真の融合である。小柄な髙松さんから表現される筆の勢いは、非常に大胆であり奔放。その大胆な文字を龍馬が着物のように"羽織る"。勝海舟は?またお龍と乙女姉さんは?"髙松さんの世界"はどこまでも伸びやかな広がりを見せてくれるはずである。

この展覧会は4月26日(月)まで開催予定だ。あなたならそれぞれの人物にどんなイメージを抱いて、何の文字を書くか?是非想像しながら見てほしい。

中村　昌代

◆大河ドラマ以後が大切◆ 23年度、開館20年の節目目線に・運営協議会

本年度第2回坂本龍馬記念館運営協議会は2月9日、同館講義室で開き、来年度開館20周年を迎える館の重点企画などについて、特に大河ドラマ「龍馬伝」以後、龍馬をどう発信すればいいか熱心に話し合った。

会では、「龍馬伝」効果で入館者が倍増している現状を踏まえながら、21年度の運営状況、企画展の実施状況、その他、館の取り組み状況について報告を行った。今年度計画している企画展については4月開始の「龍馬と啄木」展を皮切りに「薩長同盟」展、「風になった龍馬」展、「吉村虎太郎」展と続く。内容の濃いものばかり。来年度に向けての重要なステップ内容だと意見が一致した。

さらに、来年度記念事業として今年から準備に入り、開館20年記念誌、「拝啓龍馬殿」の記念出版、そして何より、龍馬、海舟、万次郎の3人のご子孫に、募集選抜で選んだ海洋高校生ら2人を加えた5人で、アメリカを訪問「自由・平等」発信のフォーラム開催を企画している。具体的なフォーラムの場所、方法など現在検討中で、今年秋までに計画をまとめ、来年秋を実施目標にしている。締めくくりとして片岡雅文委員長は「大きな節目に向かってその足場固めをしなければいけない大事な年だ。大河ドラマで新たな龍馬ファンも確実に増えている。龍馬館の使命はより重くなる」と館がひとつになって対応しようと結んだ。

大石　好一

入館状況

2010年3月22日現在（開館以来6,658日）

◆総入館者数		2,486,202人
◆2009年度最多入館	3月21日	4,625人
2009年度最少入館	6月30日	83人
2009年度1日平均入館者数		650人
◇最多入館	2010.3.21	4,625人
◇最少入館	2004.10.20（台風のため）	8人

編集後記

大河の影響はどうしても免れない。それに年度末が重なる。加えてベテラン総務の重鎮の定年退職が決まった。新メンバー二人の増員もとても追いつかない。来年は開館20年。もう、計画は進んでいる。非常事態だが乗り切るには当たり前だが"一丸となって"しかない。そんな中で今回は渋谷、小島両氏の寄稿原稿が2,3,4,5ページに入った。小島氏の「鍔は知っている」は連載になる。現代龍馬学会ページもじわり落ち着いてきた。内容は濃い仕上がりになった。（モ）

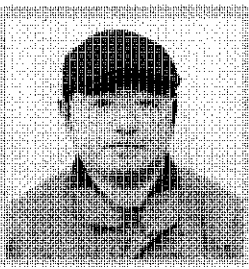
館だより"飛　騰"第73号（年4回発行）　表紙題字：書家 沢田 明子 氏
発行日　2010（平成22）年4月1日
発　行　高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL(088)841-0001　FAX(088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください
開館時間　9:00～17:00　年中無休
入館料　一般500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください

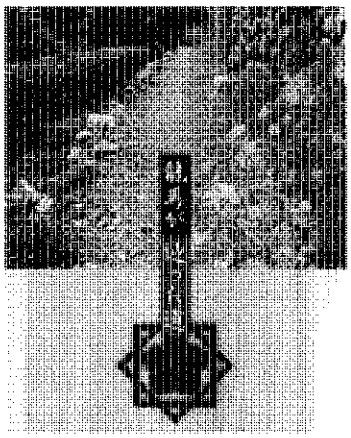
高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

「歩き龍馬」文化の創造を目指して
～龍馬の街道1,000キロ踏査～



ロンブ(NPO)代表
春野　公寧呂



私は現在、四国と山口県に残る、龍馬が辿った街道と関連史跡について、研究・踏査している。即ち、四国と山口県の脱藩道、龍馬が各藩の情勢を探るため脱藩直前に歩いた各街道、嘉永三年に四万十川の土木工事の現場監督として出向いた時に歩いた土佐西街道、茶店立ち寄りの伝承がある松山街道である。その内、四国内の脱藩道と脱藩直前に歩いた街道の踏査は終え、その成果をコースガイド書「龍馬が辿った道」（ロンブ刊）シリーズとして刊行している。これまで、その踏査で歩いた距離は往復1,000キロを超える。

［皆の知る「龍馬」は皆の知らぬ「龍馬」］

私が龍馬の街道の研究を始めたきっかけは、四国の脱藩道沿線自治体が発行しているコースガイド冊子を見てからである。私は10年以上前から、四国の無名峰や戦跡、鉄道廃線等のガイド書を地域活性の観点から発行しているのだが、数年前まで、敢えて龍馬は題材として取上げなかった。それは龍馬があまりにも「知られ過ぎている」存在だからである。誰もが知るものを本にする必然性はない、と考えていたのである。

しかしある時、ふと前述の脱藩道の冊子を見た際、愛媛県と高知県梼原町以外の地域の脱藩コースを、国道や県道に記していることに違和感を覚えたのである。例えば、いの町や日高村の国道沿いの何割かは藩政期、湿地帯であったため、そこに道は存在しなかった。

脱藩道と言えば、「龍馬遺跡」の中でも重要なものであるにも拘わらず、未だにその道跡が解明されていないことに愕然とした反面、これを解明すれば低迷している脱藩道人気に再び火がつき、沿線市町村の観光振興に繋がるのではないかと思い、踏査に取り掛かったのである。

そして高知市の龍馬生家跡から愛媛県の長浜港まで往復約300キロを踏査した結果、高知市以外の全ての市町村に古道が残存していることが判明したのである。

［驚くべき発見］

その「真の」脱藩道を踏査する過程で、新たな龍馬遺跡も発掘できた。龍馬が風呂を借りた志士邸や食事をした旅籠（現在も民宿として営業）、梼原松ケ峠（まつがとう）番所まで龍馬一行を道案内した人物の子孫宅等である。

四国の「真の」脱藩道のガイド書を刊行後、これが高知県知事に認められたことにより、更なる龍馬への探究心が芽生えることになったのだが、そんな中、隣県のある驚くべき新聞記事を偶然発見したのである。

その'02年の記事には、龍馬が脱藩直前、讃岐琴平から阿波美馬の奉行邸に行き、そこで多額の活動資金を貰い、土佐に帰った旨の伝承が記されており、更にその奉行屋敷は現存し、そこに龍馬が使用した布団や番傘、木製便器まで残っているというのである。それにも増して驚くことは、その奉行が船中八策の原案である国是七条を、最初に龍馬に説いた人物とされていることである。

早速調査したところ、龍馬と関わった多くの人物も浮かび上がってきたのだが、この伝承内容に矛盾する点はなく、「口伝史実」である確信が得られたので、その文久元年10月14日から翌年2月29日にかけて龍馬が歩いた四国四県の街道踏査に入ったのである。この旅路に於いて龍馬は長州萩で久坂玄瑞に会い、そこで脱藩を決意し、阿波の奉行邸では「維新への開眼」を行うことになるのであるから、この街道は脱藩道以上に重要な「みち」と言えるだろう。

［「歩き遍路」よりも「歩き龍馬」］

ところで、四国四県の龍馬街道の総距離は500キロを超え、沿線市町村は32自治体に及ぶ。更に脱藩直前に龍馬が歩いた四県の街道は回遊コースとなっている。それを元に去年4月、私が地元新聞に打ち出したのが「歩き龍馬」構想である。これは「歩き遍路」になぞらえたものだが、龍馬街道を徒歩旅行で辿り、龍馬の追体験をしようというものである。道々の風景を愛でながら、寺社境内や峠で休憩し、微笑む地蔵に手を合わせ、大きな集落の旅館等に泊まりながら続ける徒歩旅行はまさに、藩政期の旅の体現に他ならない。車の旅では見えない龍馬の「残影」も、徒歩の旅ならくっきりと瞼に焼き付けられることだろう。

この龍馬街道をより身近に感じて貰うため、去年春から高知と徳島県の各自治体施設で無料写真展も開催している。写真はコースに沿って市町村別に掲示しているので、街道歩きを擬似体験できることだろう。写真以外にも実物の幕末大砲の砲弾や幕末期製造の大砲の模型、藩札、各藩の地域貨幣、龍馬の拳銃と同型銃等も展示してある。

［第一回「龍馬の研究大賞」は誰の手に?］

私のように、一般の龍馬研究家や公的機関が行わないような研究を地道に行っている「草莽の龍馬研究家」は少なくない。が、残念なことにそれらの研究が全国的に周知される機会は少ない。これは龍馬研究界にとって大きな損失と言わざるを得ない。対策としては、現代龍馬学会や龍馬記念館が幅広く全国から情報を吸い上げ、それを整理してカテゴリー別に分け、再び全国へ発信すること等が考えられる。「龍馬の研究大賞」というような賞を設け、毎年研究レポートを全国から募集するのも一つの手段であろう。その時「古記録がないものは信用できない」というような愚鈍なことを言っているようでは、龍馬界の進歩はない。受賞者には高知までの往復の旅費と宿泊費、寸志が与えられ、龍馬記念館での講演が約束される。そして入選者たちの研究を一冊の冊子として刊行する。

あらゆるジャンルの龍馬の研究が集積・周知され、成熟していって初めて「真の龍馬維新」の幕が開くのである。その幕を開けるのは、あなたかも知れない。

こぼれ話

―犬歩棒当記（一）―
矛盾する史料のはざま

宮川　禎一

龍馬の婚約者だったとされる千葉佐那について筆者はこの一年間くわしく調べてきた。とても他人とは思えないほどにである。

千葉佐那の基本史料は明治二十六年八月二十一日に甲府の小田切家に滞在中の佐那にインタビューした山本節の「坂本龍馬の未亡人を訪ふ」という記事である。それは『山梨日日新聞』『読売新聞』『女学雑誌』にほぼ同じ内容で続けて掲載された。この記事の中で佐那は「龍馬と結納を交わした」と述べているのだ。

二人の婚約の真相については更なる検証が必要だが、筆者の最大の疑問点はこの山本の記事にみえる佐那の人柄である。記事全体からはこの五十六歳の千葉佐那は快活で、よくしゃべり、よく笑う明るいおばちゃんといった印象を受ける。ひとり寂しく晩年を送っていたようには決して受け取れないのだ。

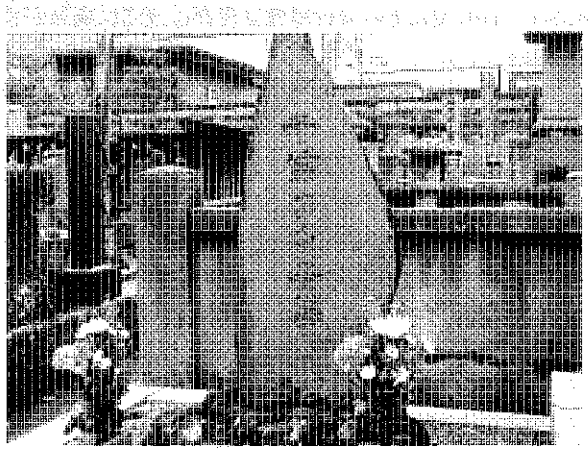
筆者の違和感は佐那が「明るく、よくしゃべる」点である。確か坂本龍馬はこの佐那を姉乙女に紹介する手紙（推定文久三年・十四日付。北海道坂本龍馬記念館蔵品）で佐那のことを「至りて静かなる人なり。ものかずいわず」と書いていたではないか。

このふたつの史料が示す矛盾した千葉佐那像をどうみるべきか。龍馬の記述を重視して山本節の観察と記述の不正確さを指摘する人もいるのだが、それはどうだろうか。

佐那の兄千葉重太郎が陽気でおしゃべり好きな江戸っ子だったことは丹波山国隊の記録『征東日誌』に明らかだ。その妹が無口とは考えにくい。桶町千葉道場には多くの侍が剣術の稽古に通ってきていたので、佐那は若い男性としゃべることには慣れていたはずである。では龍馬が受けた佐那の物静かで無口な印象はどうしてなのだろうか。

筆者の結論はこうである。千葉佐那は龍馬が本当に好きだったので「彼の前でだけ無口だった」のではなかろうか。猫を被っていたとは思わない。好きな男性の前でうまくしゃべれない女性。スポーツが得意でサバサバした男勝りな女性が本当に恋をしたときに取る態度のように感じられるのだ。美人だった佐那が龍馬の死後も生涯を独身でとおしたことがその愛の深さを物語る。

これは実は「歴史の史料論」ではない。時空を超えた「男女の問題」なのである。



コラム・龍馬のこと

人間・坂本龍馬の魅力

高知桂浜郵便局長　大崎　隆徳

坂本龍馬ほど多種多様な人物と付き合った人間を私は知らない。土佐の武市半平太、岡田以蔵、中岡慎太郎、河田小龍、岩崎弥太郎に始まり、江戸では勝海舟、千葉定吉、千葉重太郎。越前の松平春嶽。紀州の陸奥陽之助。薩摩の西郷隆盛、小松帯刀。長州の桂小五郎、高杉晋作、吉田松陰、三吉慎蔵。名前を挙げる程に龍馬の人脈の広さに改めて驚く。公家、大名、家臣、そして上士、下士となぜ龍馬がこれほど多くの人物と付き合えたのか。私なりに人間・坂本龍馬の魅力について述べてみたい。

第一に、龍馬は身分や肩書きを全く気にしない。相手が殿様であろうと貧乏な人間であろうと、そんな事は全く気にせずに付き合う。当時としてはありえないタイプの人間である。「みんなあ同じ人間よ。」と言う強い信念を持っていたように思える。

第二に、どんな立場の人間の意見にも耳を傾け、いい所は全て取り入れようとする懐の大きさに驚く。普通の人間はある年齢になると自分の考えが確立して他の意見には耳を貸さない人が多い。自分の考えに固執せずに広い視野を持つ事は、私もぜひとも見習いたい。

第三に、争いや戦いを嫌う平和な考えである。これは優しい家庭で育った事が大きいと思える。「人と人との殺し合いはワシはごめんじゃ。」と語り、あれだけの剣の達人でありながら、人を斬ったと言う事実がほとんど残っていないのは見事である。

最後に私が一番憧れるのは、自分が天下を取ろうとしなかった事。

過去の偉人のほとんどは最終的に天下を取っている。そしてそれを目的として行動する。龍馬は西郷に「日本が変わったら、ワシは世界の海援隊でもやろうかのう。」と言うセリフを残している。

この言葉こそが、龍馬の志しと、夢の大きさを物語っている。「ワシは何もいらん。日本が良うなったらそれでえい。」龍馬の優しい声が聞こえそうだ。

会員便り

中岡慎太郎の魅力!

長州　マツノ書店　松村　久

私は山口県の片隅で古本屋のかたわら維新史料の稀覯本を復刻しており、八年前からは県外の本も手がけている。

幕末に活躍した地域は限られる。先ずは贖罪の念もこめ会津と取り組む。紹介の新聞記事を見ると、「何と宿敵長州が、また会津へ???」小社は直販専門なので、直接電話注文が入る。お互いに方言丸出しで困ったがトラブルもなく、これまで『会津戊辰戦史』など七点を復刻してきた。薩摩ではマスコミにこそ歓迎されたが、西郷、大久保とも地元ではほとんど売れず。仙台、水戸に至っては、全国的に高く評価されている本なのに、なぜか新聞は無視。この地で「明治維新」は禁句なのか。

さて、土佐は長州以上に幕末への関心の高い地域である。超零細の小社はいつも「限定三百部」の上、根がへそ曲がりのため龍馬ブームにも乗れず……。そばにいるいぶし銀、中岡に目をつけた。本書の復刻を強く推して下さるお客様も多く、この二月に史上初の中岡伝、昭和三年刊『中岡慎太郎先生』（尾崎卓爾著）を復刻した。

今は固定客だけで大半を売り、マスコミへは宣伝しないが、いつぞや『維新土佐勤王史』を復刻したときお世話になった「高知新聞」へ謹呈したところ、今回も好意的な記事になった。そして一万円もする本が三日間で五十冊近くも売れ、その後はやむなくお断わり!

たった一紙でこんなに売れることは十年に一度もない。この盛り上がりは会津以上。ちなみに購入者の多くは慎太郎生誕地に近く、彼の話になると止まらない。そういえば、もとを正せば本書の著者も地元の熱狂的ファンだ。すべては、中岡慎太郎の人間的魅力によるものであった。このことをあの世で一番よろこんでいるのは、きっと盟友・龍馬に違いない。

高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://ryoma-kinenkan.jp